

# 男性スポーツ不適應者からみた ジェンダーとスポーツ

— 日本における男性性とスポーツ文化の探求に向けて —

大 東 貢 生

## 要 旨

この論文の目的は、日本での男性性とスポーツとの関係を考察するために、男性性とスポーツとの親和性について、“スポーツができない・関心がない男性”への調査から考察することにある。インタビュー調査から、“スポーツができない・関心がない男性”とスポーツとの関わりを5つのグループに分けて解釈した。第1グループは、その男性に影響を与えた人・モノ・情報がまとめられている。このグループは、男性としての役割と役割期待と考えられる。第2グループは、周囲からの影響に対する対応がまとめられている。このグループは、その男性の自己認識の問題と考えられる。第3グループは、スポーツを積極的にしないことがまとめられている。このグループは、自己認識と結びつく当人の行動の傾向と考えられる。第4グループは、スポーツと積極的に関わることがまとめられている。このグループは、その男性がスポーツを始めるきっかけと行動と考えられる。第5グループは、その男性のスポーツ観がまとめられている。このグループはその男性の＜スポーツに対する思い＞とも考えられる。この5グループを、コンネルの枠組みに従って、スポーツにおける3つの構造から解釈を行った。

キーワード 男性問題、男性性、スポーツ、体育教育、生活史

## 1. 問題の所在

この小論の目的は、日本における男性性とスポーツとの関係を考察するために、ジェンダー、特に男性性とスポーツとの親和性について＜スポーツができない・関心がない男性＞への聞き取り調査から考察することにある。

近年日本ではスポーツをめぐる環境は劇的に変化している。20世紀後半の日

本では企業や学校で行われる組織的な競技スポーツが中心であった。しかし1990年代の不況による企業活動の不振から活動を休止する企業スポーツが多くなり、他方学校スポーツでも少子化や運動系クラブ離れから衰退の危機にある。こうした変化に加えて、最近では地域などでの自由な取り組みによるスポーツ活動が行政や教育関係者から提起されている。文部科学省はこのスポーツへの取り組みを〈生涯スポーツ社会〉として提起しているが、<sup>1)</sup> 21世紀においては〈一部の、競技のうまい、若い世代のみの〉スポーツから〈誰もが参加できる、誰もが楽しむことができる〉スポーツへの転換が図られている。

しかしながら誰もがスポーツを楽しめると言われている〈生涯スポーツ社会〉の形成に関しては、ジェンダーから見て様々な問題点が指摘されている。これまで女性は〈女らしさ／女性性〉からスポーツをすることに対してマイナスのイメージを植え付けられてきた。〈女性は力が弱くて運動神経も鈍く温和な性格をしている〉、だから〈スポーツができない・関心がないことが当然である〉と言われてきた。杉本厚夫が「女性は長い間スポーツをすることが女らしくないという理由でスポーツから除外されてきた。そこには女らしさとスポーツという社会的規制が働いているからである」<sup>2)</sup>と語るように女性はスポーツから長い間除外されていた。しかしながら、先のシドニーオリンピックでの女性の活躍や、野球やサッカーなど〈男性のスポーツ〉と思われていた分野にも女性が進出することで、経験的に見ても女性がスポーツをすることへの偏見は少なくなっている。そして第2波フェミニズム以降のジェンダーフリー社会の創出に関して、女性とスポーツの関係についての研究は数多く見られるようになってきている。<sup>3)</sup>

ところでこうした女性とスポーツの関係から、男性とスポーツとの親和的な関係が容易に推測される。多くのジェンダーの二項対立がそうであるように、〈女性はスポーツに関心がなくて・できなくて当然〉という見解は〈男性はスポーツに関心があって・できて当然〉という考え方と対になっているであろう。〈男性は女性と比べて遅しく活動的で運動能力に優れているからスポーツぐらいできて当然だ〉と言われ、〈スポーツの一つもできないやつは女を守れないどころか女の尻に敷かれてしまう〉、〈男性は戦闘的であるのでスポーツといったものに関心を示さなければならない〉などの言説は、今日の男性中心社会に

おいてはまさしく自明視されていると思われる。<sup>4)</sup> またそれだけではなく＜スポーツができない・関心がない男性＞は杉本が言う「変人」<sup>5)</sup> の烙印を押されてしまう可能性がある。すなわち、スポーツに関しては、男性はスポーツに関心がないことへの、女性はスポーツに関心を持つことへのマイナスのサンクションが働いていると言えるであろう。<sup>6)</sup>

この2つのサンクションのうち、＜女性がスポーツができる・関心を持つ＞ことに対する研究は先に述べたようにさまざまな研究が蓄積されている。しかしもう一方の＜男性がスポーツができない・関心をもたない＞ことへの研究はほとんどなされていないように見受けられる。その理由としては、第一にConnell (Connell, R. W.) が言うように、従来のフェミニズムでは、＜女性／男性＞というジェンダーの二項対立的な側面が強調されがちであったことがあげられるであろう。<sup>7)</sup> 特にこれまでのジェンダー研究では女性が＜男性中心社会＞から受ける抑圧が問題となってきた。こうした女性中心の考え方では、男性を＜女性を抑圧する対象として＞研究することに収斂しがちであると思われる。第二に、体育学や教育学において＜男性はスポーツができる・関心がある＞と自明視され、＜どうすればスポーツができるように教育できるか＞という視点しか持てなかったことが指摘できる。その上、第三に＜スポーツができない・関心がない＞当の男性たち自身が＜スポーツができないこと、スポーツに関心がないこと＞に対して、男性としてある種の後ろめたさを感じており、声をあげることができなかったことがあげられる。

しかし、2000年6月の国連特別総会「女性2000年会議」においては同棲や同性愛カップルを認めるかどうかで女性たちの間から様々な意見がなされたように＜女性＞内での差異が顕著になってきていることが議論されている。そして近年では、＜男性＞内の差異に対しての議論もなされている。たとえば、Connellは、男性性（男らしさ）と男性の関係も、女性性（女らしさ）と女性の関係のように完全に一致しているわけではなく、むしろ男性による権力維持のために、ある特定の男性性を持つ男性がその男性性を持たない男性を抑圧していると言う。<sup>8)</sup> したがってスポーツと男性性の研究においては、これまで可視化されてこなかった＜スポーツができない・関心がない男性＞と男性性との関係性を探ること、すなわち＜被害者としての男性＞の研究を行うことによって、

スポーツと親和性のある特定の男性性と別の抑圧された男性性との関係を考察していくという、男性性の構造の実証的な研究上でのジェンダー研究の新しい視点が考えられると思われる。

こうした観点に基づいて、筆者は先に〈スポーツができない・関心がない〉男性と男性性との関わりがどのように研究されてきたのかについて整理を行った。すなわち、①男性運動からスポーツができない男性の出現を概観し、②体育・スポーツ論での文脈での〈スポーツができない男性〉に対する視点の出現を、③スポーツ社会学での〈スポーツができない男性〉に対する視点の出現を年代別に概観した。その概観からは、体育・スポーツ研究の分野でもスポーツ社会学の分野でも、〈スポーツができない・関心がない男性〉に対する視点は出現しつつあることをまとめた。また、この視点をコンネルの枠組での、スポーツにおける「構造モデル」と「ジェンダー体制」から、〈スポーツができない・関心がない男性〉についての考察が、「分業構造」「権力構造」「カセクシス構造」から捉えることが可能であると考えた。「分業構造」の領域では、性別役割分業としてのスポーツとして、なぜ男性がスポーツをしなければならないかが示されると考えた。特に男性とスポーツとの親和性と女性とスポーツとの不親和性が経済的な観点から展開可能であることを述べた。「権力構造」の領域では、男性による権力の維持のためにスポーツのできない男性が抑圧されるのかを示すことが可能であると思われる。「カセクシス構造」の領域は、運動神経に優れた男性、マッパな男性がなぜ男性の理想とされるのか、またホモフォビアとスポーツとの不親和性について展開できることを述べた。<sup>9)</sup>

したがって以下では、前述した先行研究のまとめと概念枠組に基づいてスポーツと男性性についての仮説を索出するために、スポーツができない男性に対するライフヒストリー法にもとづく聞き取り調査を行い、当の男性の語りから今後の実証研究のための仮説を導きたいと思う。

## 2. 調査の方法

この研究ではライフヒストリー（生活史）法による聞き取り調査という方式を採用した。ライフヒストリー法とは、谷富夫によれば定量的な仮説検証型の

科学に対して、定性的な仮説を索出する方法であるだけでなく、現象の総合的把握が可能となる類型構成、そして異なる社会と文化の主観的意味の理解を可能とする異文化理解の3つの利点があるという。<sup>10)</sup> ライフヒストリー法を用いたのは、先行研究がほとんどなく仮説検証型の研究ができないことがあるとともに、男性性とスポーツについての問題状況の全体像を考える必要があること、さらには男性とスポーツとの親和性が自明視されている今日の男性中心社会の中で〈スポーツができない・関心がない男性〉は〈スポーツができないこと・関心がないこと〉を隠して生きているため、定量的なサンプリングを行う事が非常に困難であることがある。すなわち〈スポーツができない・関心がない男性〉を可視化する必要があったからである。特に〈スポーツができない・関心がない男性〉の生き様こそが男性中心社会の中で異文化そのものであると考えられるからである。<sup>11)</sup>

また分析に際しては、KJ法という方法を採用した。KJ法は川喜田二郎が提案したアイデアを生み出すための方法である。川喜田は科学を野外科学・書斎科学・実証科学に分け、従来の科学は野外科学である仮説発見的な方法を軽視していると批判している。そして野外で行う「探検」「観察」「発想」こそが仮説を発見するために重要な科学の第一歩であることを言う。KJ法はカード化した情報を「親近感を覚える」カードどうしを集める作業を行うことによって最終的に一つの図式化を行うものである。<sup>12)</sup> この研究でKJ法を用いたのは、個々人のライフヒストリーからスポーツと男性性をめぐる類型構成を考えなかったからである。

こうした方法により、2000年6月から12月にかけて調査対象者8名に対して面接式のインタビュー調査を行った。調査対象者は20歳代から60歳代までの西日本に居住している男性である。<sup>13)</sup> インタビューは調査対象者の承諾を得てテープに録音・再生した。テープは話題ごとに約600枚にカード化し、KJ法に基づいて分析を試みた。

### 3. 結果と考察

先のライフヒストリーをKJ法により分析し、スポーツができない・関心が

図1. スポーツができない男性とスポーツとの係わり概略図

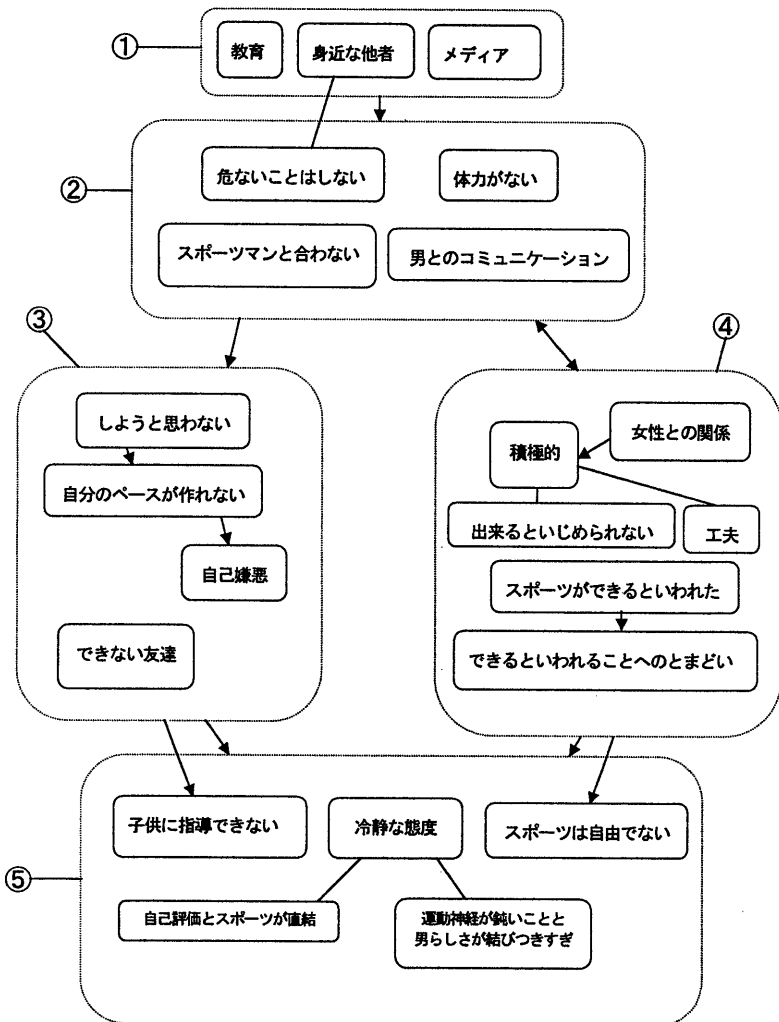


図2.「身近な他者」について

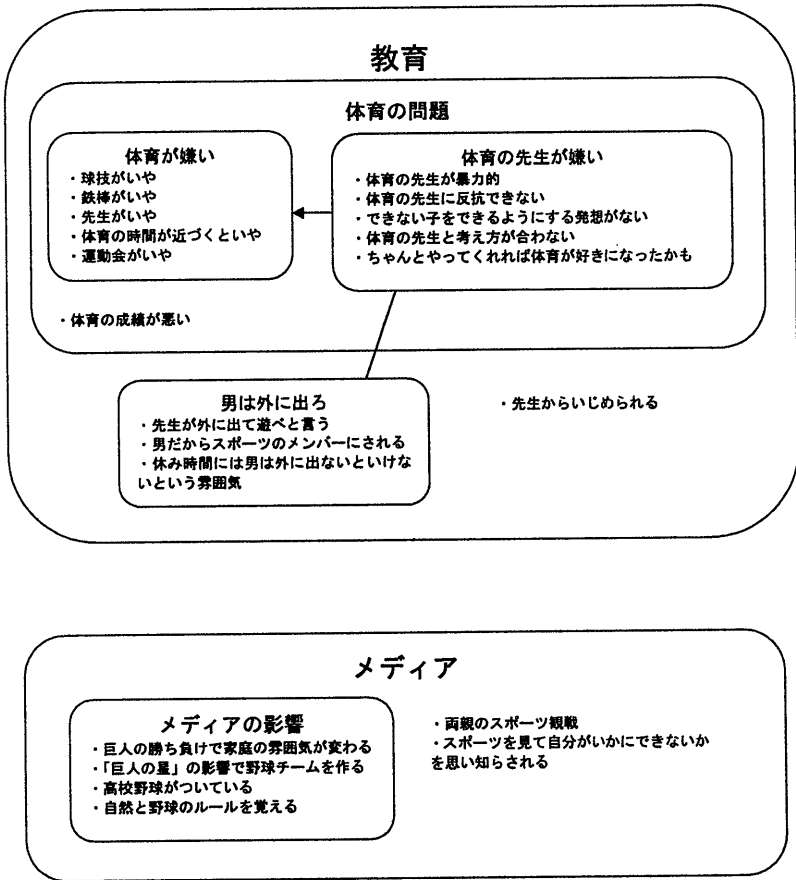
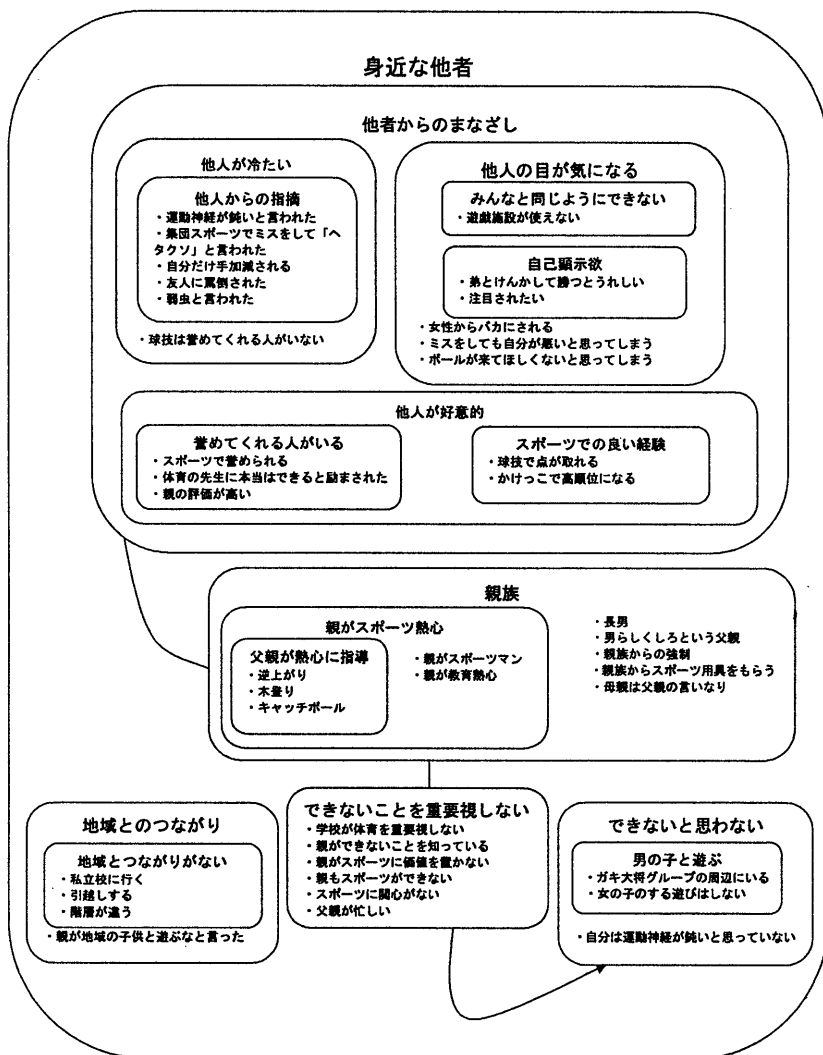


図2.「本人に影響を与えた人・モノ・情報」について





ない男性とスポーツとの関わりを図1のように図式化した。KJ法による分析では5つの部分にグルーピングすることができた。第1グループは「教育」「身近な他者」「メディア」という小グループから成り立っている。第1グループは＜本人に影響を与えた人・モノ・情報＞という内容が含まれている。第2グループは「危ないことはしない」「体力がない」「スポーツマンと合わない」「男とのコミュニケーション」という小グループから成り立っている。第2グループは＜周囲からの影響に対する対応＞という内容が含まれている。第3グループには「しようと思わない」「自分のペースが作れない」「自己嫌悪」「できない友達」という小グループから成り立っている。第3グループは＜スポーツを積極的にしない＞という内容が含まれている。第4グループは「積極的」「女性との関係」「できるといじめられない」「工夫」「スポーツができると言われた」「できるといわれることへのとまどい」という小グループから成り立っている。第4グループは、第3グループとは逆に＜積極的にスポーツと関わる＞という内容が含まれている。第5グループは「諦観」「子供に指導できない」「スポーツは自由ではない」「自己評価とスポーツが直結」「運動神経が鈍い」と男らしさが結びつきすぎ」という小グループから成り立っている。第5グループは＜当人のスポーツ観＞という内容が含まれている。以下では5つのグループごとにその詳細について説明し解釈を加えていきたいと思う。

### 3. 1) 第1グループ-本人に影響を与えた人・モノ・情報-

図2は第1グループの詳細である。「身近な他者」グループは「他者からのまなざし」「親族」「地域とのつながり」「できないことを重視しない」「できないと思わない」にグルーピングすることができた。

「他者からのまなざし」グループは「他人が冷たい」「他人の目が気になる」「他人が好意的」などがある。スポーツには個人で行う形式と集団で行う形式があるが、集団で行う形式の場合、みんなと同じようにできないと「ヘタクソ」などと指摘されることがある。またスポーツに関心がなければ、ボールを積極的に取りに行かないなど＜練習＞をしない傾向がある。その結果「みんなと同じようにできない」と本人が考えるようになる。そしてミス避けるために「ボールが来て欲しくない」と思うようになると考えられる。また、男性にとっ

てスポーツができないことで「女性からバカにされる」という意見は、ジェンダーの権力関係を考える上で重要である。当の男性自体が男性は女性よりスポーツができるものだという考えを持つとともに、周囲の女性もまた男性がスポーツができないことへのステレオタイプを持っていることが推測される。逆に「他人が好意的」という考えもある。「スポーツができない」と思っている、ほめてくれる人がいることでできるようになることが推測される。「親族」については父親の役割が重要である。父親がスポーツができたり、スポーツを指導することに熱心であると、スポーツをしたくない子どもは余計な負担を感じることになる。しかしながらほとんどの場合は父親との権力関係から父親につきあうことになる。この父親からの役割期待が男の子にスポーツが＜できる・できない＞に対する過度の反応をとらせてしまうことがある。また「男の子だからスポーツ用品をもらう」といったこともある。女性はスポーツ用品をもらうということがほとんどないということから、男性と女性との年少期におけるジェンダーバイアスが影響していると考えられる。「地域とのつながり」では、地域の学校でない学校、例えば私立校に行くことで地域とつながりが切れてしまい一緒にスポーツをする機会がなかったことがある。この場合「身近な他者」が周囲にいないことを意味している。「できることを重要視しない」では、他人が「スポーツはできなくてもいい」と考えていることがある。こうした身近な他者の存在いかんによって「仲間と遊ぶことが楽しい」ことや「運動神経が鈍いと思わない」という自己認識につながっていると考えられる。「他者からのまなざし」グループは他者からの役割期待を反映しているとも考えられる。この場合、他者には父親を代表とする親族・友人・後述する学校教員がある。こうした人々が＜男性はスポーツができたほうがいい・関心があった方がいい＞という価値観を持ち、ステレオタイプの役割期待を押しつけることが、押しつけられる男性に大きな負担になっている。

「教育」グループは「体育の問題」「男は外に出ろ」などがある。「体育の問題」では「体育が嫌い」の中に「球技・鉄棒・先生が嫌だ」という意見がある。球技に関しては野球ができるかどうか球技全体が嫌にならないかの焦点になっている。「体育の先生が嫌い」に関しては、体育教員に＜スポーツができない・関心がない男の子＞に対しての対処方法や意欲が感じられず、指導したことが

できないと暴力をふるう、努力すればできるなどひたすら精神論で考える教員がいることが考えられる。体育教員は、自身が体育ができるし関心があるので、＜男の子はスポーツができて当たり前＞という考え方や自身が暴力や精神論で鍛えられてきたという背景が指導に現われるのかもしれない。<sup>14)</sup> こうした体育教員の教育姿勢が「ちゃんと指導してくれれば体育が好きになったかも」という考えに現われていると考えられる。「男は外に出る」というのも＜男の子は外に出て遊ぶものだ＞というステレオタイプの反応であると考えられる。また「男だからメンバーに入れられる」という考えもある。この場合、友人からの誘いや親からの強制的な参加が考えられるが、その際みんなと同じようにできないことで再び「他者のまなざし」にさらされるということが考えられる。ここにも周囲のジェンダーバイアスが働いている。

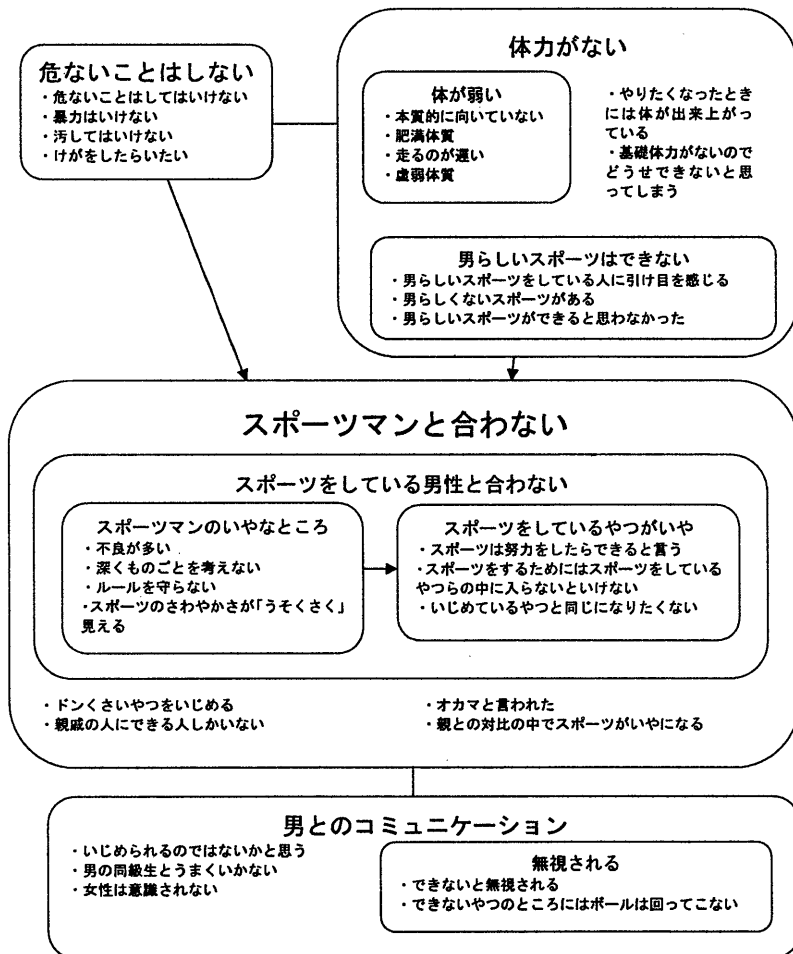
「メディア」グループは「メディアの影響」などがある。父親がテレビでスポーツ観戦をしており、特定の球団の勝敗によって家庭の雰囲気が変わったりすることがある。メディアでのスポーツの強制的な観戦は、一方では自然と競技に親しめるといった考えがある反面、スポーツができない自分との落差を思い知らされるということもある。

第1グループは、本人に影響を与えた人・モノ・情報がまとめられているが、男性としての役割と役割期待として考えられるであろう。その場合、役割期待を担う人は父親・体育教師・友人であることが多いが、メディアなどで伝えられることもある。またその役割期待で重要なことは、期待する他者が別の他者からの役割期待に依っており、またスポーツが好きであることがある。こうした他者からの役割期待は社会におけるジェンダーの固定化された形式である。

### 3. 2) 第2グループ-周囲からの影響に対する対応-

図3は第2グループの詳細である。「危ないことはしない」「体力がない」「スポーツマンと合わない」「男とのコミュニケーション」にグルーピングすることができた。「危ないことはしない」は、親などから「危ないことをしてはいけない・暴力はいけない」などと禁止されることが考えられる。「体力がない」では、当人が肥満や虚弱体質からスポーツに向いていないと考え、その結果「男らしいスポーツは体力がいるからできない」という結論になる。ここに

図3.「周囲からの影響に対する反応」について



は男らしいスポーツの存在がある。男らしいと考えられているスポーツには野球や柔道、ラグビーなどが語られる。そのほとんどが競技スポーツであり暴力的で体力を必要とする競技である。したがってスポーツ競技内にも区別があり、男性が男性的なスポーツを志向するといった側面があると考えられる。だからこそ「やろうと思った時には身体ができてしまっている」という考え方に、暴力的で体力の必要なスポーツこそが男らしくていいがそうしたスポーツは自分にはできないという考え方になる。

「スポーツマンと合わない」には、こうした体力のある暴力的なスポーツをしている男性には不良が多くルールを守らないということが語られる。これは「スポーツをしている男性がいや」という考え方につながる。スポーツと不良が結びつきは男性漫画などでよく取り上げられる題材であるが、<sup>15)</sup> 実際にスポーツ不適應者の語りからでもスポーツをしている人は不良であるという認識があることがわかる。「男とのコミュニケーション」では、スポーツマンが不良であることから「話をしてもイジメだれるのではないか」といった「イジメ」と結びつくことがあるようである。無視されイジメられることから、ますます「スポーツマン＝不良でとうしようもない奴」という関係が強固になっていくようである。このことは、いざスポーツをやろうと思えば「不良たち」の中にはいらなければいけないのでそれがいや」という、スポーツをする場がないということにもつながる。

第2グループは周囲からの影響に対する対応がまとめられているが、当人の自己認識の問題とも考えられるであろう。スポーツができない・関心がないことについて、さまざまな理由が考えられ＜周囲からの禁止＞＜身体上の問題＞＜スポーツをしている男性のパーソナリティ＞＜コミュニケーション＞の問題として捉えられていると解釈される。そうした認識の中から＜スポーツマンが不良で深く物事を考えない嫌な奴でそんな奴とはコミュニケーションできない＞というスポーツをめぐる男性像の典型例が形成されるのかもしれない。こうしたことは＜スポーツができない・関心がない男性＞が、スポーツをめぐる暴力性などの男性性の代わりに別の男性性を獲得していく契機となるとと思われる。

### 3. 3) 第3グループスポーツを積極的にしないー

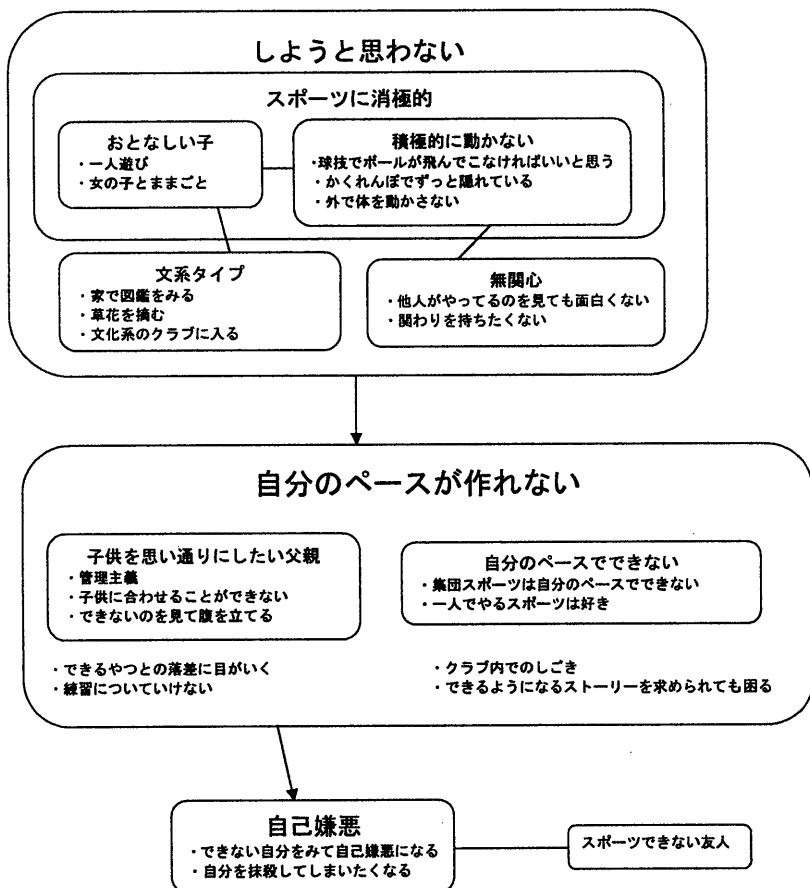
図4は第3グループの詳細である。「しようと思わない」「自分のペースが作れない」「自己嫌悪」「スポーツできない友人」にグルーピングすることができた。「しようと思わない」では、一人遊びが好きでスポーツに無関心であることや球技でボールが飛んできて逃げ回ること、文化系のクラグ活動などが語られる。〈スポーツができない・関心がない男性〉には外で積極的に動き回るのが嫌いで文化系の活動が好きであるという傾向がある。しかしこうした傾向は小さい時には周囲に評価されず、外で遊ぶことが〈男の子らしい〉という面ばかりが評価されることがあることは、1節でみたとおりである。

「自分のペースが作れない」では、子どもと一緒に遊んでいるように見えて子どもを自分の思い通りにしたい父親の存在がある。1節でも父親の存在が焦点であると述べたが、一番身近な男性としての父親が男性のモデルにならないことが語られている。また、「自分のペースでできない」では、集団スポーツは周りに合わせなければいけない、先輩からのシゴキについていけない、などが語られている。これはスポーツをするときの方法の問題として〈スポーツはみんなでやるもの〉という考え方があり、それ故自分のペースでできないことが積極的な拒否傾向につながっているようである。

またこうしたスポーツに関する積極的な拒否の結果、スポーツができる男性を見て自己の能力不足を嘆く「自己嫌悪」につながり「スポーツは見るのมေးや」というようになる。また類は友を呼ぶように「スポーツできない友人」と一緒になりがちということもある。スポーツのできない友人の存在は、できない男性ができない男性とどちらがよりできないかを競うといった消極的意味だけではなく、スポーツができないことを積極的に認め合うといった傾向もあることが解釈される。

第3グループはスポーツを積極的にしないことがまとめられているが、自己認識と結びつく当人の行動の傾向と考えられるであろう。〈文化系傾向〉は女性であればあまり問題にならないであろうから、〈体育系=男性〉〈文化系=女性〉といった学校でのジェンダーバイアスの存在があると思われる。また〈みんなと一緒に〉という傾向は、日本のスポーツのあり方として日本文化とつながっているのかもしれない。

図4.「スポーツを積極的にしない」について



### 3. 4) 第4グループスポーツと積極的に関わる－

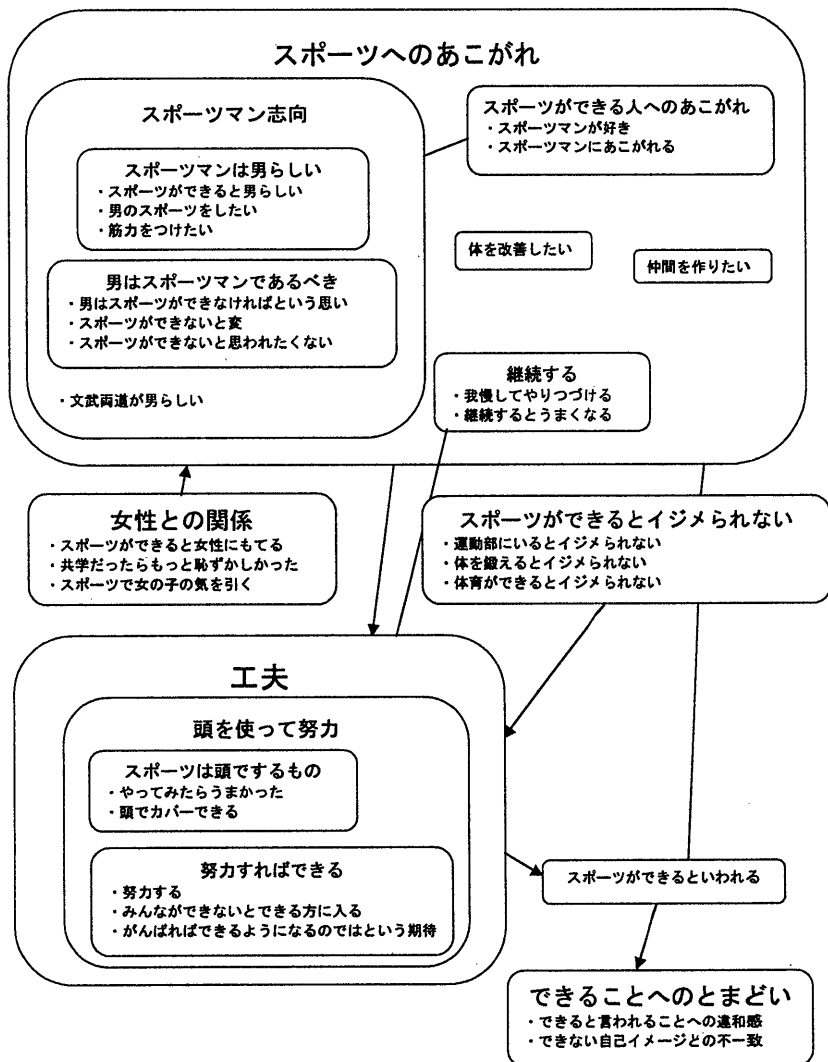
図5は第4グループの詳細である。「スポーツへのあこがれ」「女性との関係」「スポーツができるといじめられない」「工夫」「スポーツができるといわれる」「できることへのとまどい」にグルーピングすることができた。「スポーツへのあこがれ」では「男としてスポーツをしたい」といった「スポーツマン志向」や「スポーツができる人へのあこがれ」がある。これは、＜スポーツができない・関心がない＞と言われバカにされることに対しての一つの対応と考えられる。男性には、スポーツマンが男らしさの象徴として現われ、そのために自分が持っていない男らしさをもつ人に対して憧れや好意を持ち、スポーツマンであることに努力することが重要であると考えているようである。しかし、こうした傾向の他に、「他の男性とつながりたい」という考え方がある。これはスポーツができないければ男性のコミュニケーションから疎外され孤立してしまうことが考えられる。逆に言えば、野球やサッカーなどの競技スポーツの話題しか持てない男性のコミュニケーションのあり方が問題であろう。

その他の意見として「女性にもてたい」ということも語られる。これは「スポーツをしている男性はもてる」という傾向に同調した考え方であるが、男性がこのように考えている以上に、女性にも「スポーツをしている男性がかっこいい」という価値観があることの反映とも考えられるであろう。また「体を鍛えるとイジメられない」「運動部にいるとイジメられない」などイジメを避けるためにスポーツをするということもある。そうした場合一部の人たちは体力の問題を頭でカバーするといった「工夫」という努力をしていることも語られる。この努力の結果、他人から＜彼はスポーツができる＞と言われるようになる。しかしながらスポーツができるようになっていたとしてもそこにはとまどいがあり、「本当はできないのにできるように言われて違和感がある」といった自己イメージとの不一致に悩まされることがある。

第4グループはスポーツと積極的に関わる事がまとめられているが、第3グループと逆の関係になっている。＜スポーツができない・関心がない＞男性がスポーツを始めるきっかけと行動とも考えられるであろう。ここでは＜スポーツできる男性が男らしい＞という強固な価値観の存在に注目すべきであろう。これはスポーツと男性のかかわりに対するもう一つのステレオタイプとなって



図5.「スポーツと積極的に関わる」について



いる。〈スポーツマンはさわやかで熱い男が多い〉というこのステレオタイプは男性だけではなく、女性も拘束されている。また実際のスポーツでは、頭を使わなければならない側面が多いにもかかわらず、これまでの日本のスポーツでは〈筋肉バカ〉と言われるように〈スポーツを継続してきた人間〉に対する侮りがあるようであるが、こうした考えもスポーツと男性との関係を固定化し、一部の競技スポーツのみが男らしくて価値があるという考え方につながると考えられる。

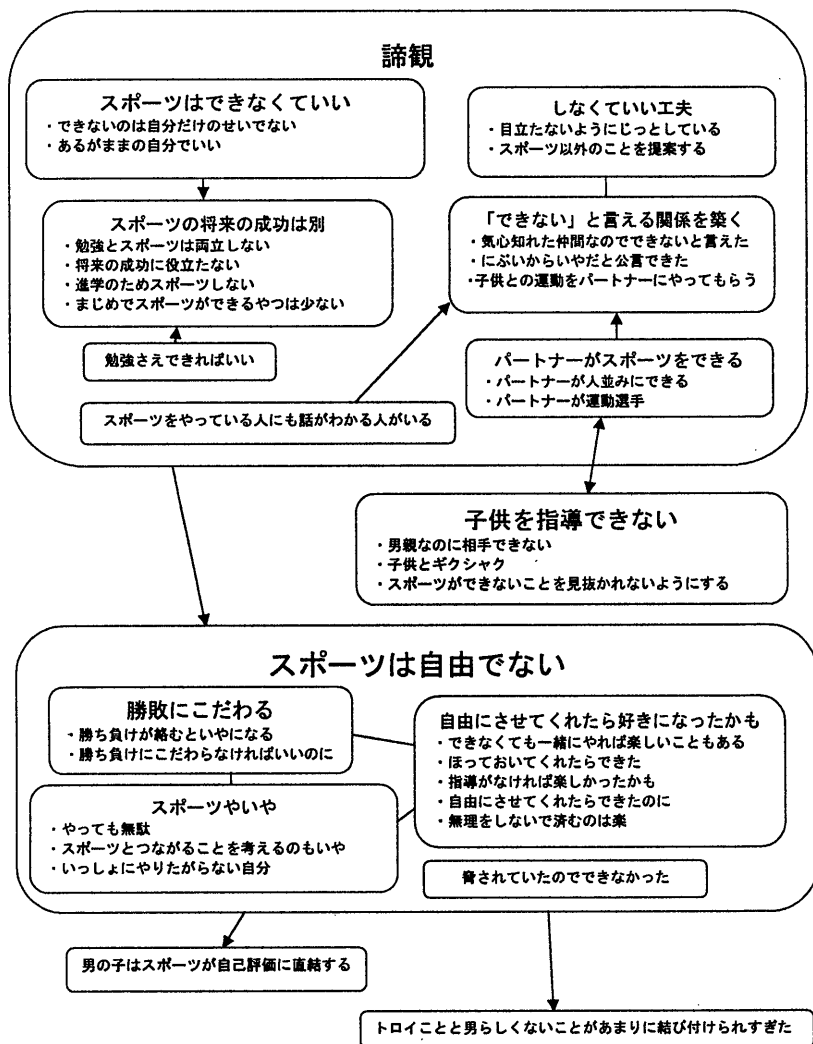
### 3. 5) 第5グループ—当人のスポーツ観—

図6は第5グループの詳細である。「諦観」「子どもを指導できない」「スポーツは自由でない」などにグルーピングすることができた。「諦観」では「ありのままの自分でいい」「スポーツはできなくていい」「スポーツと将来の成功は別」「勉強さえできればいい」といったスポーツ以外のところに価値を置く考え方が語られる。これはスポーツと結びつく肉体的な男らしさではなく、頭脳的な男らしさに重点をおく考え方であると考えられる。また「スポーツができないならできないと言える人間関係を形成する」ことも語られている。男性性との関係からいえば、自分に不利になることを切り出すことは難しい事であるが、こうした人間関係を作り上げていくことも重要なことになると思われる。また「スポーツをやっている人にも話のわかる人がいる」といった「スポーツマン=不良」という考え方からの脱却も語られる。

また、こうした「諦観」から「スポーツは自由ではない」という考え方が出現するようである。「なぜ勝敗にそんなにこだわらなければいけないのか」といった問題は、学校でのスポーツや多くの競技スポーツが勝敗にこだわり、楽しむためのスポーツという生涯スポーツ社会のために大切であると思われることに対する問題提起となるであろう。また「自由にさせてくれたらできたはずなのに」といったスポーツの指導に対する疑問もある。これもこれまでのスポーツ指導が「努力すればできる」といった精神論に立つ男性競技スポーツ指導者を中心でとなっている弊害と考えられる。

また、ここから「男性とスポーツの関係として自己評価に直結している」という考えや「運動神経が鈍くトロイことはそんなに男らしくないことであるの

図6.「当人のスポーツ観」について



か」といった疑問に結びついていくと思われる。ただ「男親なのに子どものスポーツの相手ができない」といった生殖家族を築いたがための新たな問題ということも語られている。

第5グループは当人のスポーツ観がまとめられている。これはいくつかの課題の結果でできた本人の＜スポーツに対する思い＞とも考えられるであろう。ここでは自己の経験からスポーツと社会とのかかわりについての自己の態度が述べられていると思われる。＜スポーツが成功につながらない＞は、男性としてスポーツを続けることが、結局は人生の（経済的）成功にならないという考え方と結びついている。また＜勝敗＞＜楽しさ＞などでの今日のスポーツのあり方についての考え方もある。これは競技スポーツ一辺倒であった日本のスポーツを、生涯スポーツとして考え直すためのきっかけとなるものであろう。

#### 4. 考察

こうした分析結果をコンネルの構造モデルから体系的に考えて仮説案出の整理をしたい。コンネルは、ジェンダーの構造を「分業構造」「権力構造」「カセクシス構造」から分析しているが「分業構造」は、＜男は仕事、女は家事・育児＞といった性別役割分業と考えられている。この分業は配分される仕事の性質や成果の分配といったことに関わっている。だから性別役割分業は「ジェンダーによって構造化されたある生産・消費・分配のシステムの一部」である。この分業は、①労働全般をジェンダーにもとづいて組織化することで、経済的利益は男性に、経済的損失は女性に集中させ、②ヘゲモニックな男性性が男性の団結を組織することを通じて、そのパターンを経済的な権力にしている。「権力構造」は、男性による権力の独占として考えられる。この権力の独占は職場集団や家族集団での男女の資源の不平等にとどまらず、男性側が理想や道徳を定め、議論の争点を限定し、状況の定義を押しつけるといった「ヘゲモニーを明示する能力」を有することを説明する。「カセクシス構造」は、欲望の社会的パターンとして現われるが、適切な人を愛し結婚すること、ある男らしさや女らしさを望ましいものと思うこと、近親相姦の禁止、ホモフォビアといった「禁止と誘因の結合システム」として現われる。<sup>16)</sup>

また、コンネルは男性の権力と権威としての男性性が結合する要素として、①制度化された暴力のヒエラルキー、②重工業やハイテク工業のヒエラルキー、③国家中枢における計画－統制機構、④肉体的なタフさや男性と機械の相性を強調する労働者階級の状況がある。こうした結合から、男性性のヒエラルキーは、ヘゲモニックな男性性、保守的な男性性、従属的な男性性の3つの要素から構成される。この権力構造は、男性と女性の対立だけではなく、実は男性間の対立をも現わしている。<sup>17)</sup>

コンネルはジェンダーは制度の集合体ではなく、あらゆるタイプの制度の中に存在すると言う。ここで、ある制度内で「ジェンダー関係におかれた行動の状態」を、その制度の「ジェンダー体制」と言う。<sup>18)</sup> このジェンダー体制の例として「家族」「国家」などをあげているが、スポーツもこうしたジェンダー体制の例として考えられるであろう。

この解釈からすれば、スポーツという制度でのジェンダー体制の考察という枠組みを考えることが可能ではなかろうか。スポーツにおける構造モデルとジェンダー体制(表1)では、＜スポーツができない男性＞についての考察が、「分業構造」、「権力構造」、「カセクシス構造」から捉えることが可能である。例えば、「分業構造」では第1グループでの＜男とは外で活動するもの＞、第2グループの＜体育系＝男性＞＜文化系＝女性＞といった考え方が経済的な性別役割分業につながると考えられる。「権力構造」では第1グループでの＜スポーツでの自己顕示欲の発揮＞、第2グループでの＜スポーツと暴力性＞、第4グループでの＜スポーツマンの力強さ＞、第5グループでの＜勝敗へのこだわり＞が、男性の権力志向と暴力性がヘゲモニックな男性性どのように関わっているのかが考えられるであろう。「カセクシス構造」では第1グループでの＜女性からバカにされる＞、第2グループでの＜スポーツと同性愛＞、第4グループでの＜スポーツをしていると女性にもてる＞、第5グループでの＜パートナーがスポーツができる＞などがスポーツを通じての男らしさの強制やホモ

表1. 構造モデルとジェンダー体制<sup>19)</sup>

	分業構造	権力構造	カセクシス構造
スポーツ	①	②	③

フォビアにつながる側面があるであろう。

以上日本における男性性とスポーツとの関係を考察するために、ジェンダー、特に男性性とスポーツとの親和性について〈スポーツができない・関心がない男性〉への聞き取り調査から、KJ法による分析を行い、5つのグループの解釈結果をもとに、コンネルの枠組みに従ってスポーツにおける3つの構造の解釈を行った。今後の展開であるが、今回のまとめを中心にして仮説の精密化と問題の構造化を行い、実証研究を通じて仮説を実証していきたいと考えている。その際にはこうしたスポーツのジェンダー化を即している関係のある家族・地域社会などのことに配慮していくとともに、ここにも触れた日本という国家の中でのスポーツの役割をナショナリズムとの関係から考えていきたいと思う。そうすることによって日本における男性性とスポーツの研究の社会変動的な側面が考察できるであろう。

#### 〈付記〉

この小論は、第4回日本ジェンダー学会大会（2000年9月、於：東洋英和女学院）における発表報告を加筆修正したものである。この小論をまとめるに際しては、メンズスタディーズ研究会のメンバーには何度も示唆を頂いた。この場を借りてお礼申し上げたい。

#### 注

- 1) こうした動きでは行政や教育研究関係者が活発な提言をしている、国の施策では文部科学省が「スポーツは、人々に楽しみや喜びをもたらし、人生をより豊かにし、充実したものとする世界共通の文化の一つであり、現代社会において、個々人の心身の健全な発達に必要なものと言えます」と謳い、平成12年9月に「スポーツ振興基本計画」（平成13～22年度）を策定し、国民のだれもが、それぞれの体力や年齢、技術、興味・目的に応じて、いつでも、どこでも、いつまでもスポーツに親しむことができる生涯スポーツ社会の実現のため「総合型地域スポーツクラブ」の全国展開を施策として提唱している（文部科学省「文部科学省の主な施策（スポーツ・青少年）」（[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/index.htm), 2001. 2. 10）。

- 2) 杉本厚夫『スポーツ文化の変容－多様化と画一化の文化秩序－』世界思想社，1995年，106頁。
- 3) 古くは江刺正吾『女性スポーツの社会学』不昧堂出版，1992年などを参照。最近の研究では，角田聡美「女子体育における身体への政治－『婦人衛生会雑誌』の分析を中心に」『スポーツ社会学研究』8号，2001年や，谷口雅子「スポーツにおける規範の形態とジェンダー」『スポーツ社会学研究』6号，1998年などがある。
- 4) たとえば，Michener, J, A.: Sports in America, Random House, 1976年。  
(宮川毅訳『スポーツの危機（上）（下）』サイマル出版会，1978年を参照。
- 5) 杉本 前掲書，16頁。
- 6) しかし，行政主導で行われる＜生涯スポーツ社会＞にはこうした二項対立的なジェンダーの枠組みはほとんど考慮されていないように思われる。例えば原田宗彦が大阪府のパンフレットの中で「学校での体育が嫌いだったからスポーツをするのも嫌いだ」という声を耳にするが，生涯スポーツは社会におけるスポーツとは，自分がルールを決め，運動の強度を決め，自分自身で「勝敗」の意味を決める，いわば自分中心のスポーツである」と言われるとき，無意識のうちに＜スポーツはいいものだ，価値があるものだ＞というメッセージがあり，＜スポーツのできない・関心がない男性＞の存在が無視されているだろう。原田宗彦「挑戦！生涯スポーツ社会づくり」大阪府スポーツ・青少年 生涯スポーツ振興室編『LIFE LONG SPORTS』1号，2000年，1頁を参照。
- 7) Connell, R. W., 1987. *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*, Polity Press, UK 1987. (森重雄・菊池栄治・加藤隆雄・越智康詞訳『ジェンダーと権力，三交社，1993，85-118頁)。
- 8) Connell 前掲書，173-175頁。
- 9) この議論に関しては大東貢生「日本における男性性とスポーツについて－男性性とスポーツ文化の探求に向けて－」『佛大社会学』25号，2001年，62-80頁参照。
- 10) 谷富夫「ライフヒストリーとは何か」谷富夫編『ライフヒストリーを学ぶ人のために』，1996年，3-28頁。
- 11) 2000年9月に宝塚市と共催で「第5回男のフェスティバル」が開催されたが，そこで著者は「スポーツができなくて何が悪いんや！」という分科会を主催した。スポーツができない体験を語ることを通じて，スポーツができないことを共感する体

験をした。スポーツができない・関心がない男性はスポーツができて当然と言う男性中心社会の中で孤立して存在している。この場合同じ境遇にある人々との出会いが非常に重要なものになるであろう。この経過については「第5回男のフェスティバル報告書」(近刊)を参照。

- 12) 川喜田二郎『発想法』中公新書, 1967年を参照。
- 13) 調査対象者は, 筆者がスポーツができない・関心がないことを伝え, そのことに共感してくれた個人的なつながりの中で, インタビューを承諾して頂いた男性である。先にも述べたようにスポーツのできない・関心がない男性は, スポーツができない・関心がないことについて触れたがらない。これは男性中心社会の中で自らが不利益をこうむることを避けるためである。
- 14) スポーツ指導をめぐる体育教師, 特に男性体育教師の問題は近年新聞などでも盛んに取り上げられている。『毎日新聞』2000年9月27日朝刊, 同2001年4月30日朝刊を参照。
- 15) 実際, 男性向けの漫画の過半数はスポーツや不良を題材としており, こうした漫画が男性のスポーツ観を形成していることは否定できないであろう。
- 16) Connell 前掲書, 167-178頁。
- 17) Connell 前掲書, 173-175頁。
- 18) Connell 前掲書, 188頁。
- 19) 大東貢生「東アジア地域の青年層におけるジェンダー意識の探求に向けて一儒教的ジェンダー関係の枠組みと仮説索出」『佛教大学総合研究所紀要』6号, 1999年, 111頁。

(おおつかたかお 佛教大学総合研究所研修員)



The Gender and Sports, which were seen from  
“The Man who does not concern  
and can not Sports.”

— Toward a Search of Masculinities  
and Sports Culture in Japan —

Takao Otsuka

The purpose of this paper is to consider the affinity of masculinities and sports from the investigation to “the man who does not concern and can not sports”, in order to consider the relation between masculinities and sports in Japan. From interview investigation, the relation “the man who does not concern and can not sports” and sports was divided into five groups, and was interpreted. Into the 1st group, it is summarized that the person, the matter, and the information that the man was affected. This group is considered to be a role of male, and a role expectation. Into the 2nd group, it is summarized that correspondence to the influence from the circumstance. This group is considered to be the problem of self-recognition of the man. Into the 3rd group, it is summarized that does “not” make sports positive. This group is considered to be the tendency of the action of the man connected with self-recognition. Into the 4th group, it is summarized that is positively concerned with sports. This group is considered to be the cause which the man begin sports of. Into the 5th group, it is summarized to the man’s sports view. This group is considered to be the thought “which the man holds in sports”. According to the framework of Connell, R.W., it is interpreted from three structures in a sport to these five groups.